

CORE
BOOKS

進藤純孝

Junko SHINDO

日本の青春

波瀾万丈の時代の流れに抗して

毎日新聞社

迪藤純孝
Junko Shindo



日本の青春



波瀾万丈の時代の流れに抗して



毎日新聞社

日本の青春

¥ 380

昭和44年12月15日 印刷

昭和44年12月25日 発行

著 者 〇 進 藤 純 孝

発行人 星 野 慶 栄

編集人 岡 本 博

発行所 毎 日 新 聞 社

郵便番号 100・東京都千代田区竹平町1

郵便番号 530・大阪市北区堂島上 2-36

郵便番号 802・北九州市小倉区紺屋町7-207

郵便番号 450・名古屋市中村区堀内町4-1

印刷・共同印刷 製本・佐久間製本

0036-634700-7904

は し が き

思うこと、考えることを述べているうちに、他人はいつかわたしのことを文芸評論家とゆびさすようになった。

文芸について書くことが多かったからそうなったのか、そうなったから文芸を語る機会が多くなつたのか。

が、わたしの初心は、文芸に執することではなく、人間に執することであり、ひらたくいえば、気になることを考えることだった。

大学での専攻を選ぶとき、文学ではなく、倫理を採ったのも、そこに初心があったからで、今もなお姿勢は変わっていない。

ところで、わたしの気になることというのはいったい何なのか。

いうまでもなく、それはわたし自身のことであり、身のまわりのことである。文芸について書く場合も、気になっているのは、やはりわたし自身と、身のまわりのことに他ならない。

そういうわたしの姿勢を明らかにする意味で、文芸にかたよらずさまざまなことについて語ったわたしの文章を一本に編む機会を得たことは、まことにありがたい。

題して「日本の青春」という。おおげさな気もするが、わたしの過ごした青春も、わたしの身のまわりに息吹いている青春も、他ならぬ日本の青春である。

大上段にふりかぶって論じるよりも、悔いや憾みをのこしたわたしの青春や、踏みにじられ、怨み、恨みにまみれている身のまわりの青春を語る方が、日本の青春はよくわかるかも知れない。

ことばで理解するよりも、現実を把むことを大切にしなければならぬことが、今日ほど痛感されているときはあるまい。それほどに、問題が切実になってきたということか。

むろん、この本が日本の青春のすべてだなどというつもりはない。しかし、日本の現実のさなかに息吹いた青春は、わたしの青春、わたしの身のまわりの青春を例外におくことはできない。

しかし、いったい、青春とはなんだろうか。

解せぬこと、不思議なこと、妙なこと、そういうものに、げんんな表情で立ち向かうことが青春なのではなからうか。

とすれば、わたしには、解せぬこと、不思議なこと、妙なことばかりである。ということとは、わたしは、いつまでも青くさく、青春の中に置きざりにされているということかも知れない。

だから、バカみたいに、いつまでも、青春と取っ組んでいる。しかし、そういう男が、一人いるということとは事実であり、それは、一つの真実を明かしてはいまいか。

昭和四十四年十一月

著者

目次

二つの青春⁹

- いつも危機 11
- 政治意識 22
- わが二十歳 25
- 最後の一句 28
- 水かけ論の憂うつ 31
- 二つの青春 34
- 学生のさわぎ 64
- 群動ヤム 67
- 甘ったれ 71
- 変われば変わる、だが 74
- どれ、おれに 78

左手の闘争 83

- 望むべき并州もなし 85
- 左手の闘争 88
- 理由なき孤独 91
- 動きを阻むもの 94
- 柔軟な自信 97
- 演ずべき役割 101
- 抑圧の任 104
- 関 心 108
- 小市民宣言 111
- 解放された神経 115
- のんき修業 119
- 権威と対抗 122
- 威張って世話になれ 126
- 黒白をつける 130
- 生と死 133
- あんた・おまえ 137
- じゃ、さようなら 141

安請け合いの活気 145

- 思想の本質とはなにか 147
- 文学と人生 159
- 社会に潜在する動き 166
- 暴力の根源はなにか 169
- 無頼漢まかり通る 172
- 大義ニ死スの意味 174
- 科学と腕力主義 178
- 生きた人とは？ 182
- 俗悪さを冷笑せず 184
- ジタバタとヌラリクラーリ 188
- 弁解を断つ 191
- 安請け合いの活気 194
- プライバシーを思案する 200

日本の青春―波瀾万丈の時代の流れに抗して―

二
つ
の
青
春

≡≡≡ い つ も 危 機 ≡≡≡

ジャーナリズムというものは、過去の想い出とも、未来の夢とも無縁なのであろう。無縁というときつすぎるが、少なくとも、本質的には過去や未来にかかわってはいかない。

かかわっていくのは、ジャーナルという言葉が端的に示すように、今日ただ今に對してである。従つて、ジャーナリズムの根本問題は、今日ただ今にどうかかわるかということであらう。つまり、今日ただ今に對する態度といったものが、ジャーナリズムの性格を左右するということになる。今日ただ今へのかかわり方を考えれば、ジャーナリズム批判が成り立つというわけだ。

格好の材料が一つある。昭和三十五年というと、安保新条約反対の大規模な騒ぎのあつた年だが、その七月十五日付け読売新聞（夕刊）に、私は次のような文章を書いている。

「文学界」が「政治と芸術の間」、「群像」が「文学者の政治への発言」というふうに、文芸雑誌の八月号は、政治と文学の問題を特集している。いうまでもなく、五月十九日以来の、政治的、社会的な不安を対象にして、だれもが発言しているわけだが、これといつて強くひきつけられるような言葉は見あたらなかった。

いや、深い思慮から発する目立つ言葉が見つからなかったばかりではなく、その文学者らしい一見冷静な口調のかげには、おさえようのない興奮と声の高さがはつきり見られた。こうした文章を読みながら、二十年前、太平洋戦争にのめりこんでいった時の、文学者の態度も、同じような興奮と、声の高さにいरोどられていただろうと思われ、私の気持ちは沈みこんだ。

デモの季節で多忙をきわめてか、一ヵ月あまり顔を見せなかつた友人たちが、ぼつぼつわが家にあらわれるようになった。彼らは、作家か批評家か編集者か、ともかくも文芸の領域で棲息している連中であるが、申し合わせたように、

「デモに行ったか？」

と聞く。その口ぶりには、むろん国会周辺には姿を見せただろうなという、念をおすような心配がただよっている。それはちやうど、

「防空演習には出たでしような」

「金属の献納はすませたでしような」

といった、あの時代の、そうでなければ非国民だがというような、一種の脅迫の感じに似通っている。だから、私が、

「いや、デモには行かなかった」

と答えると、友人たちはみな、それでもお前は文学者の一人なのか、とでもいわんばかりの、あきれた表情をする。なかには、

「からだでも悪かったのか、それとも旅行でもしていたのか」

と、まだ信じきれぬふぜいで、問いかえしてくるやからもある。彼らは、いやしくも批評家ともあろうものが、この時代の危機に、のんびり家に腰を落ちつけているなんてことがありうるか、と思ひこんでいるらしい。

六月七日の夜おそく「若い日本の会」からの速達便が届いた。江藤淳の署名入りなので、いったいなにをいつてきたのかと封をきってみると、抗議集会への誘いである。その中に、「政治にどれほど無関心な人間でも、あるいはたとえ安保には賛成の人でさえも、あの単独議決によって喪われようとしている民主主義だけはなんとしても守り抜かなくてはならないと思います」という一節がある。私は、このおしつけがましい一文を非常に不快に思った。そして「デモに行ったか?」と聞かれるたびに、この不快な感情が、またしても頭をもたげてくるのだ。

民主主義は、五月十九日の単独採決によって失われようとしていると、私の接するたいの意見は主張するのだが、果たしてそうであろうか。「なんとしても守り抜かなくてはならない」ほどの民主主義が、この国のどこにあったのか。「だけは」「なんとしても」「なくてはならない」というような一方的な文章が安直に書けることからして、民主主義などというものが、はじめからなかったことの明らかな証拠ではないか。

こうしたことを考えながら、私はもう一度「あの単独議決によって喪われようとしている民主主義だけはなんとしても守り抜かなくてはならない」という一文を見なおしてみた。

ここにひそむものはなにか。この文章を支えているものは、問答無用の精神である。日本文芸家協会も去る六月十日、声明を出し、その中で「この事態を言論表現の自由の土台である民主主義そのものの危機であると理解しています」と述べているが、ここにもまた、問答無用の精神がぬけぬけと顔をのぞかせている。

「いまや、民主主義は、おびやかされているのだ。いま抵抗しなければ、かつての文化人のようにもの笑いになると思う」とか「へ理屈をこねればいろいろな見解もあるうが、五月十九日以後の民主主義については、だれの目にも、とても正気のものとは、思われまい」といった、しょせんは「問答無用」というにすぎぬ言葉が、文学者たちから異口同音に発せられ、それがそのまま、呼びかけとなり、声明となったということは、決して見のがしていいことではない。

——日本国民よ！

刻下の祖国日本を直視せよ

政治、外交、経済、教育、思想、軍事……何処に皇国日本の姿ありや

と呼びかけ、

——革新の時機！ 今にして立たずんば日本は滅亡せんのみ

国民諸君！

武器を執って立て！ 今や邦家救済の道は唯一つ「直接行動」以外に何物も無いとさげんだ、かつての陸軍青年将校の考えかたと、「民主主義を守れ」と声をからす文学者の考え